




シヤンダイア物語

～智慧の峰～

福田 弘生

Anima Solaris



第三章

ギルゾン来襲

智慧の峰サルパートの守護神エイトリに声を授けられた吟遊詩人のサシ・カシユウは、カイト・ベーレンスの探索を逃れてポイントポートを脱出した。北の將の兵士にさらわれた妹に巡り会えるまで、自ら目を閉じ続ける事をエイトリ神に約束したため不自由な身ではあったが、サシは危険からの脱出が歌の次に得意だった。しかし、カインザーの貴族の中で最も聡明と言われているカイトもそう簡単には引き下がらなかった。ソントール領であるはずなのに、ぴつたりと追っ手が追跡してきている事に、サシは驚きとともに気が付いていた。

(なるほど、どうやらベーレンスの若き当主は噂どおりの出来物らしい。これは久々に齒ごたえがある逃避行になりそうだ)

長身瘦躯、身なりはみすばらしいがその動作にはどことなく品がある。一芸を極めたものの誇りだろうか。年齢はまだ壮年期にさしかかったばかりのはずだが、長い髪は八年前に受けた苦痛と長く辛い旅のためにすっかり銀色になっていた。

かつて彼は、サルパートの旅芸人一座の一員だった。早くに両親を無くし、一座に妹とともに拾われたサシは、美しい歌声で徐々に一座の花形になっていった。しかしそれを妬んだ仲間が毒を飲まされて声を失い、役立たずになったサシは妹と共に一座を追われる事になった。失意

の中でサルパートの北部山中をさすらうっていた二人は、北の將の兵隊に襲われて妹は奪い去られた。そしてサシ自身は声について両目の光までも奪われた。しかし降りしきる雪の中、瀕死の身で妹の無事を願う男の心の中の祈りは浄化と医療の神エイトリに届いた。

エイトリはサシ・カシュウに両目と声を与え、妹に会うまではその目を開いてはならぬと命じた。妹思いのサシが、兵達をすぐに追いかけて逆に殺されるのを心配したのである。神の意を受けたサシは時を待つ事を約束し、比類無き美声を頼りにシャンダイアの国々を放浪していた。

サシは今、サルパートの峰の東側のソントール領を通過して、北に向かっている。一見すると、年老いた愛馬に引かれた盲目の吟遊詩人のゆるやかな足取りのように見えだが、旅慣れた男の足は疲れを知らず、峰の西側に比べれば穏やかな気候にも助けられて常人とかわらぬ距離を毎日かせぎ出していた。

智慧の峰の西のサルパート側でギルゾンの襲撃が恐ろしい噂として広まっているように、現在峰のソントール側の街道沿いの村々で語られているのは、カインザーのロッセイ、クライバーの二將の北進の事だった。噂ではカインザー軍は虐殺を繰り返しながら進んで来る事になってい

るが、カインザー人を知っているサシ・カシュウはそれが事実と違う事を知っていた。カインザー人は粗暴だが残酷ではない。残酷さにはまた繊細さも必要なのだが、カインザー人の精神には繊細さのかけらも無い。

この並外れて精強な戦闘民族の軍隊にソントールで匹敵できるのは、西の将マコーキンが指揮する軍と、陸軍総大将のハルバルト元帥が指揮する皇帝の近衛部隊だけだろう。だがそのマコーキンは、要塞を奪われた罪により、現在首都グラン・エルバ・ソントールで裁判を受けている。

かなり重い罪になる可能性が高いとの噂もサシは耳にしていた。サシ・カシュウの美しい歌声はソントール領でも知られていたが、盲目と思われているせいか人々はあまりサシに警戒しなかった。その利点を利用して彼はせっせと両陣営の情報をあつめた。サシは北の将の兵士にさらわれた妹を探し出すため、集めた情報を提供するのと引き替えに様々な人々を利用して今日まで活動してきた。

サシが見るところ、マコーキンの最大の失敗は要塞付きの黒い盾の魔法使いゾノボートを死なせてしまった事だろう。陸軍元帥ハルバルトはマコーキンの天才的な軍事の才能を惜んでいるが、現在の帝国内ではバステラ神の神官の力は強大である。帝国の礎を築いたガザヴォツ

クを中心とする魔法使い達を後ろ盾とした勢力が裁判では力を持つだろう。家格の高い参謀のバーンの家を中心とした貴族達がどこまで頑張れるかだが、状況は厳しい。マコーキンは得難い人物ではあるが、西の将の地位は事実上消滅している。

政治情勢の不安定な国境地帯を渡り歩くサシ・カシユウはソントールのほかの將軍達の情報も集めていた。南の将とユマールの将は現在海軍の充実に心血を注いでおり、陸軍の能力はあまり高くないと思われる。東の女將軍は山猫に囲まれて暮らしている変人で、平地での力は未知数。この三将はこれまでセントーンを囲み続けながら落とせないできている。

（そこで北の将だ。この男がどこまでカインザーの精鋭を押さえつけられるのか）

「吟遊詩人どの、一曲お願いしたい」

酒場の奥で目立たぬように沈み込んでいたサシの前に男が立った。手にした熱い薬湯のカップをコトツと机に落としてサシは緊張した。

（この私が声をかけられるまで気がつかないとは、これは並の人間ではないぞ）

疲れてはいたが、詩人は礼儀を失わないように胸に手を当て、声が聞こえたほうにうやうやしくおじぎをした。

そして豎琴を取り出そうと袋をたぐりよせながら言った。

「はい、何なりと、お望みの歌を」

「どんな歌でも良いか」

サシは少し傷付いたように答えた。

「はい、もちろん」

「それでは、ユリエラの薔薇を」

「サルパートの娘達が好む歌をここでですか」

サシは驚いた。そして以前にこの歌を希望したサルパートの巫女を思い出した。

（レリス侯爵の娘スハーク、リラの巻物の次の守護者であったな。もうサルパートに戻っているはずだ。今頃は学校にいるのか）

サシは注意を前に立つ男に向けた。男は続けた。

「いや、酒場ではない。我らがあるじが部屋で所望しているのだ」

「そうですか、それでは部屋までおうかがいいたしましたしよ
う」

有名なサシ・カシュウがそこにいる事に気がついた酒場の一部から不満の声があがった、ゆっくりと立ち上がったサシはその声のほうに深々とおじぎをした後、軽く手を振ってすぐに戻る事を知らせた。だがそれが無理かもしれない事も内心察知していた。

サシ・カシュウは男に連れられて二階に上った。部屋の

中には人が数人いると思われる。しかしそれにしても空気が澄み過ぎている。吟遊詩人は豎琴を握りしめた。ちようどその時、窓の外で騒ぎが聞こえてきた。誰かがカインザーと叫んでいる。カシュウは首をひねった。

（おかしい。ロツティ、クライバーがいかに速くても、戦闘をしながら進んでくるのだ。まだここまで来るわけがない）

外の騒ぎはだんだん大きくなってきた。

部屋の奥から落ち着いた老人の声がした。先ほどの男の主人らしい。

「吟遊詩人どの、どうやらカインザーの軍団がやってきたようです。ここは危険になるかもしれません。せうかく来ていただいたのに残念だが、お逃げになったほうが良いでしょう」

サシは慎重に言葉を選んで答えた。

「いや、間違いでございましょう。私はポイントポートからここまで旅をしてきました。確かに目が不自由ですのでも速くはありませんが、カインザーの二将よりはかなり先んじていたはず。こんなに早く追いつかれるとは思えません」

「しかし、騒ぎが広がると何がおきるかわかりませんよ」

その時、階下の酒場にて男達の大声が聞こえた。宿泊している客達が逃げ出しはじめたのだらう。

「吟遊詩人どの、私達も正しい情勢がわかるまで非難いたしません。とりあえず一緒に参りましょう」

サシはその部屋の主人達に連れられて、階下に降りて馬車に乗せられた。座席が堅い何の変哲もない普通の馬車だ。サシ達を乗せると馬車はすぐに走り出した。サシ・カシュウはそこで以前にこれと同じ空気に包まれた事を思い出した。

（私とした事が不覚であった）

サシは、向かいに座っている主人に声をかけた。

「わたしの聞きか見えない臉に、薔薇の紋章の幻が浮かんでおります。サルパートのバルツールマスター様でございますね」

老人は楽しそうに笑った。

「さすがだ、サシ・カシュウ。われわれの雰囲気はそれ程わかりやすいかね」

「いいえ、たまたま私は亡くなったカインザーのマスター、ロトフ様のおそばに呼ばれた事があります。これほどの静かな緊張にあふれた者を率いられるのはよほどの実力者。バルツールのマスターしかおりませんまい」

肩に力強い手が置かれた。

「つむ。わしはサルパートをあずかるマスター、モントだ。そなたをとどめ置くようにとのベリック王のご命令が届いた」

サシ・カシユウはあきらめたように肩の力を抜いた。

「なるほど、あの騒ぎもモンツ様の手の者の仕業でしたか」

「いや、あれは違う。カインザーの不器用者が数名追いかけてきていた。どうやらどさくさに紛れて、そなたをどうにかしようとしたらしい」

「よろしいのですか。カインザーの者の目の前で私をさらって。ベリック王はカインザーと同盟していると思いましたが」

「かまわん。わしらは王の命令を聞くものであって、カインザーに気を使う必要など無い」

老人は事も無げな様子を装って答えた。だがサシには、その言葉の裏に複雑な思いが揺れている事を声から察する事ができた。

（バルトル人は今、難しいところに来ているのだな。二千五百年続いた生活が変わろうとしているのだ）

サシは心配そうに質問した。

「私の馬はどうなったのですしょう」

「心配するな。おまえの唯一の道連れを奪うつもりは無い。荷物と共にわしの手の者が連れて追いかけてくる事になってる」

サシは静かに微笑みをうかべると、ゆっくりと磨き抜かれた豎琴を袋から出した。

「お客様、後ほどどこかに落ち着きましたら一曲いかがでしょう」

マスター、モントは吟遊詩人の神経の太さに感心して嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ぜひ聞かせてくれ」

北の将の凍える要塞を出たテイリンは、要塞の西の軍道を通り、兵達とその家族の住む大きな町を通り抜けて、雪が積もるサルパートの山に分け入った。西の将の要塞が陥落して、カインザーからソントール勢力が駆逐された後、若い魔法使いは様々な情勢を考えた末に北の将の要塞に身を寄せた。だがゾック達を要塞には入れなかった。マコーキンとゾノボートが支配していた西の要塞には、どんな生き物もどんな軍隊も受け入れる、ある種のいいかげんさのような雰囲気があったが、この要塞は将も魔法使いもあまりにも自分の世界を築き上げすぎていて、よそ者の入り込む隙間が全く無い。

山に慣れた者でも躊躇するような木々の間や岩の上を、事も無げに歩いてテイリンは中規模の洞窟の前に立った。その暗い洞窟の中にゾック達がいる。生き残った二千数百匹すべてである。山育ちのテイリンは、すでにこのあたりの地形をくまなく調べていた。カインザーからここまでの山道の調査を総合してみると、サルパートの峰に

は洞窟が非常に多い。これは軍事上の重要な要素になるはずだ。

テイリンはカインザー軍の強さを知っている。いつになるかはわからないが、必ずや彼らは北の将に戦いを挑みにここまで来るだろう。カインザー大陸で自分を追い続けたあの赤い將軍も必ずやって来る。テイリンは後に調べて、クライの町で殺した指導者らしき男が、あのクライバー男爵の父親である事を知っていた。だが、そのクライバーがすでにソントール領に侵攻している事までは知らない。ソントールの將軍の支配地域は一國に匹敵するほど広く、南の端がわずかに浸食されたくらいの情報は、中々要塞まで届かないのが現状だった。もっとも西の將だったマコーキンならば、自分の支配地域の隅々まで細かい伝達網を敷いたに違いないが。

（とりあえず北の將とその大軍はここ、北の要塞に腰をすえて盤石の体制を整えている。問題は魔法使いギルゾンのほうだ）

テイリンはいつものように両手を上げて呼びかけの念を放った。暗い洞窟の中に、急にざわめきがおこり、光る目が洞窟の闇を星のように飾った。それを見届けた魔法使いは、洞窟に背を向けると一声かけ声を上げて急に走り出した。その姿に引っ張られるようにゾック達が次々と洞窟から飛び出し、おなじみのバッタのような跳

躍でテイリンに従う。白い雪煙が舞い上がる中、小鬼と呼ばれる山岳生物ゾックの全軍が出陣した。だが、かつてカインザーを侵攻したときよりその跳躍は高く、速度も驚く程に速い。暗い洞窟から外にでると、ゾック達の足が赤く染まっているのが見える。カインザー大陸で死んだ巨竜ドラティの血を浴びたおかげで、ゾック達は強靱な機動力を手に入れていたのだ。足こそ赤く染まっていないが、テイリンも同様だった。小鬼の魔法使いとゾックの部隊は智慧の峰に沿って南下を開始した。

その頃、はるか南のサルパートの中心部に、山を登る異邦人の一行の姿があった。聖王マキアと別れてネイラシから峰の中腹にある学校へ向かう、カインザーの王子セルダンとその友人達である。白い雪の中に点々と馬の隊列が続く。ライア山のクライドン神の神殿への道を思い描いていたセルダンは、学校へ続く道が思ったより細い事にちょっと意外な感じを持った。しかしだ両側が盛り上がったその道が、うまく風をふせいでいる事にも若い王子はすぐに気がついた。マルヴェスターは不思議そうにまわりを見回しているセルダンに声をかけた。

「わかったか。どこにでも軍道をつくってしまうカインザーとは全く違う世界があるのだ」

セルダンはかじかむ手を握りしめて答えた。

「カインザー人はどんな所でも我慢強いんです」

後ろでブライスが笑った。マルヴェスターが続けた。

「敵は人間だけではない。そして北の将の要塞はもっと厳しい環境にある。我々だけでは戦えないよ。いま峰の東側を北上しているロツティやクライバーも、そのうちカインザー流の考え方が通じない時がある事を知るだろう。もっともあの部隊にはバンドンという超現実主義者がついているので、わしも最悪の事態だけは避けられるのではないかと思うのだが」

これを聞いたベロフが何か言おうとした時、ふいにブライスが身震いした。

「嫌な予感がするぞ。額のエルディ神の銀の輪からゾクゾクするような危険な感じが伝わってくる」

突如、セルダン達のまわりで舞っていた雪が渦を巻いて上空に駆け上がった。そして前方の森の上空に長い衣を着た巨大な白い人の姿が浮かび、大きな叫び声をあげた。それを見たマルヴェスターが口をあぐりと開けてあえいだ。

「おお、エイトリ神だ、エイトリ神だが泣いている」

午後の短い光の中、雪の中を疾走しながらバイオンはギルゾンに念を送った。

「本当にあそこを襲うのか」

ゾクツとするような魔法使いの冷たい答えが届いた。
「いかにも」

そして魔法使いは耳障りな声で甲高く笑った。バイオン達は現在、北の将の要塞を遠く離れてサルパートの峰の南部に入っている。そこにあるのはエイトリ神の神殿。狂える魔法使いはついに神の領域を襲う決意をしたのだ。バイオンはこの行為には疑問だった。

「神と戦う用意はあるのか」

「聖宝神など精霊に過ぎん。泣き虫エイトリなどその最弱ではないか」

ギルゾンの言葉がキリキリとバイオンの頭の中に届く。そして黒い短剣の魔法使いは皮肉を込めて笑った。

「なんじはどうだ。ドラティはクライドンと闘ったぞ。エイトリはクライドン程強くはあるまい」

「狼ととかげを一緒にするな」

バイオンは嫌そうにうめいた。そして思った。

（エイトリならば確かに私にも相手ができる。しかし、神を殺した者が他に何を恐れよう。ギルゾンをこのまま暴走させると、この山の生き物が本当に死に絶えてしまう）

小型の狼ルファーの群れは音もなく神殿を囲んだ。サルパートのエイトリ神殿は神官達の住居も兼ねた巨大な箱形の建造物だった。夏には聖王マキアもここに滞在する。威厳ある建物だが、政治的な要素が強いためと、過去に

の魔法使いは思いのままに神殿の中を走り回った。目の前にエイトリ神の神官が通りかかると手にした黒い短剣を一振りする。するとその短剣から黒い粉のような妖気が一瞬走り、それに触れたエイトリ神の神官達は叫びを上げて息絶えた。ギルゾンは魔法の感を伸ばして、神殿の中を乱暴に探った結果、自分が探している物がそこに無い事をすぐに悟った。

「無い、無い、無い。ここにも無い」

魔法使いは狂ったように叫ぶと、剣を大きく振り回して神殿に黒い火を放った。

バイオンは一足遅れて魔法使いに続いたが、巨体が神殿に入れなかったため、神殿の中の悲鳴を聞きながら悔しそうに外をうろついていた。やがて黒い炎が神殿を包み、炎に包まれた壁や柱が穢されたようにポロポロと崩れ落ちた。バイオンはその炎を見ながら、ルフィー達に殺戮をやめるように命じた。

（ギルゾンは何を探しているのだ。リラの巻物なのか、あんなもの手に入れた所でソントールの魔法使いには何の役にも立たんぞ）

やがて手ぶらでふらりと神殿から出てきたギルゾンを見たとき、バイオンはギルゾンがリラの巻物より黒の魔法のほうに繋がる何かを探しているのだと確信を持った。

エイトリ神の神殿の神官長のエスタフは、聖なるリラの巻物を抱えて、命からがら神殿を脱出した。まさかここまで襲われるとは思っていなかったため、昔から巻物は守護者の住む学校よりは、神殿に保管されていることが多かったのだ。神官長は白い長髯のいかめしい老人だったが、今、その青白い顔は恐怖に凍りついている。ガクガク震える体を若い神官達に支えられながら、エスタフは学校を目指して逃げ延びた。

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel_1/chandaia/index.shtml

ちえのみね

智慧の峰 - シャンダイア物語 -

2000年2月1日 第1版第1刷発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。